

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2014年 春号 4月9日発行 通巻52号

発行人：竹内 章（府中市分梅町）

TEL 042-364-3428

市民 NPO 行政
「協働」の先駆けとなる

四谷下堰緑地 保全活動 “下堰緑地の会” 発足、活動を移管

NPO法人府中かんきょう市民の会の事業である「下堰緑地の自然保護・保全活動」は、この3月に地域に発足した「下堰緑地の会」にその活動主体を引き継ぐことになり、会として最後の「清掃・ヒガンバナ株分け」作業を共同で3月16日(日)に実施しました。

保全活動のきっかけは、府中かんきょう市民の会(以下本会)が9年前の平成17年1月29日中央文化センターに於いて「水に親しむシンポジウム2005」を開催。そのシンポに先駆け、平成16年秋に“四谷の自然・用水を散策する”イベントが開催され四谷文化センター前に集合、参加。

そこで見たのは「下堰緑道内に咲く一輪のヒガンバナと沿線に不法投棄されたゴミ山」だった。“ゴミに負けるなヒガンバナ” “ゴミより似合うヒガンバナ”をキャッチフレーズに地域の歴史



下堰緑地 ゴミの散乱

に詳しい田中正仁さん(本会員)と活動を開始。行政・地域の町会・一般市民に呼びかけ、多くの方々に参加いただき今日の緑地に仕上げる事が出来たと感謝致します。



下堰緑地 苗木移植メンバー

活動として、行政が取り組んでいた①ゴミ問題、地域で取り組んでいた②地域まちづくり、本会で取り組んでいた③環境保護・保全。それぞれの共通項(利害?)が一致した事から活動の協調が比較的得られ易く、行政・地域・団体に信頼関係も生まれ、その成果が確実に・・・自然環境が改善して行く様子が・・・皆さんと共有できた事。この事が共に力を出し合う喜び“協働”につながったと思います。平成19年の台風9号で6本、

平成23年の台風15号では22本ものニセアカシア倒木の被害にあい、その跡地には地域の皆さんと実生木苗の移植。

COP10では府中初のグリーンウェーブ植栽を実施。定期活動(清掃月2回)のほか強風に煽られ倒木・枝折れの被害も多々あり、本会の東京都緑のボランティア(緑地保全)受講者と共同して小木、伐採、抜根、剪定など里山的な要素もあり楽しい活動であった。



台風の爪痕 2景

今回、清掃・ヒガンバナ株分け作業・伝承を通して、地域の新しい会の皆さんに体験頂き信頼関係コミュニケーションを語る事が出来ました。



左上写真のゴミ山がヒガンバナに変わる

にご尽力されているMさん、Yさん、Nさん、Iさんの活動も特筆されます。

最後に下堰緑地には多くの自生植物(センニンソウ・キツネノカミソリ・カンゾウ・ヤブラン等々、クヌギ・マユミなどの実生木)が見られ自然の豊かさが残っている、この恵まれた自然環境を保護・保全して次世代の子ども達に引き継いで戴きたいと願っています。(田上昌宣)

府中市制施行60周年記念事業

第14回レンゲまつり

4月26日(土) 午前9時30分～午後1時
押立1丁目の田んぼで

雨天と、その後の足元のコンディションが悪い時は翌日に順延になります。



- 花飾りあそび
- わら馬作り
- バッタ作り
- 布ぞおり作り
- コマ作り遊び
- 草笛作り
- シャボン玉遊び
- 府中産の蜂蜜と野菜の販売
- 都立東高校生物部の展示「自然とあそぼう」
- 写真展示「府中・農ある風景」

主催：NPO法人 府中かんきょう市民の会
後援：府中市



昨年のレンゲソウ

第9回 田んぼの学校

陽気の3月、本町農場で保育園児たちがあぜ道を散策することに出会いました。近辺にこれだけの広いところはなく、安心して場内を駆け回っていたのが印象的です。この学校は農工大の協力で9年目を迎えました。

開校当初、イネ栽培を学ぶ高学年(小学校4～6年)を対象にイメージしてプログラムを組みましたが、応募者の低学年化傾向が続き、今ではほぼ定着してきました。スタッフは教えるという意識が前面に出がちでしたが、参加者が体験で何かを感じ、気づくことが環境学習の本旨であることに気づきました。それ以降、体験を手助けすることを心がけ、農作業を通して身近な自然に触れ、保護者(父母や祖父母)と一緒に体験できること、また自宅でバケツ稲の生長観察も親子で体験できるなど、この学校の特色となりました。

手づくり感のある参加型の学校運営を

スタッフには農工大生にも参加してもらい、生徒にとっては年令が近いこともあり、親しみやすいせいか、相互に楽しみながら参加する様子が見えがえします。

昨年の収穫祭・修了式では生徒のリコーダー演奏、会場の飾りの生花を持ち寄りやおにぎり・豚汁づくりには保護者に協力いただきました。この経験を活かして、今年も、みんな参加する“手づくり感のある学校”にしたいと張り切っています。



小山たかひろ
第三小学校5年

最初のころと比べ物にならないほど大きくなっておどろきました。花がとても短い時間しか咲いていなかったのがよく受粉したなあとおどろきました。(原文のまま)

田んぼの学校2014 スケジュール

※雨天実施 (雨天時大型温室利用)

- 第1回 5月25日(日) 開校式・田植え・バケツイネ持ち帰り
- 第2回 7月6日(日) 草とり・生き物探し・イネ生育観察
- 第3回 9月28日(日) イネ刈り・ハサかけ・モミ数カウント
- 第4回 10月12日(日) 脱こく・モミすり体験
- 第5回 11月16日(日) 収穫祭・修了式 ☆家族も参加可

○募集要項 (細部は「広報ふちゅう」4月21日号に掲載)

- ・募集数 40人(こえるときは抽選)
- ・参加費 1,000円
- ・対象 小学生～大人(小学3年以下は保護者同伴)
- ・場所 農工大本町農場
- ・時間 9:00～12:00
- ・交通 自転車OK、送迎のみ車利用可

みんなおいでよ！
夢と感動の
世界へ

「ふれあいこどもまつり」に 参加して

「ふれあいこどもまつり」は、舞台を楽しみ、参加し体験することで、子どもたちの豊かな感性が育成されることをめざしています。すでに10年目を迎え、今年は7会場で開催されました。しかし府中市での開催は初めてなので、府中こども劇場が中心になって実行委員会を作り、組み立てをしました。

3月9日(日)のルミエール府中での開催までに、「アウトリーチ」が数回行なわれました。これは保育所や小学校、美術館、文化センターなどに「まつり」の出演者が出向いて、簡単なショーを見せ、「ふれあいこどもまつり」の宣伝をするのです。私も2箇所のアウトリーチに参加しましたが、その出し物の見事さに「さすがにプロは違う。お客さんを楽しませるコツをつかんでいる」と実感しました。これなら「ふれあいまつり」当日にも行って本物のショーもを見たくくなります。

私達「NPO法人府中かんきょう市民の会」は、「ただであそべる わくわく広場」というコーナーで3つの市民団体とともに、自分達の活動を紹介しながら、「コマとバッタ作り」を行いました。



コマ作り

コマの材料は木製と紙の2種類を用意しました。木製のコマは府中市のクリーンセンターに捨てられたテーブルや椅子の足を、5ミリ幅や8ミリ幅の輪切りにして作る「リサイクルコマ」です。平らな面に、子ども達が好きに色を塗りました。

紙のコマは、コマの形に丸く切り抜いた紙と、四角い紙を自分ではさみを使って丸く切り抜くものと、2種類用意しましたが、丸く切り抜いた紙を選ぶ子どものほうが多いようでした(写真右上)。



低年齢の子ども達が参加しやすい企画なので、参加者が途切れることなく盛況でした。しかし、コマを完成させても、指で芯棒をひねる動作に慣れていないせいか、回すことが難しい様子の子どもの多くを見かけました。



バッタ作り

バッタは「しゅろの葉」で作ります(写真上)。絵入りの説明書を用意しましたが、それでは分かりにくいらしく、一対一で作り方を見せながら、手ほどきをしていきました。小学校の3・4年生、「私にも教えてもらえますか」と聞いて来る母親、子どもより真剣になって作っていた父親と、年齢を問わず興味を持たれたようです。出来上がった「バッタ」を葉の上に固定すると、それなりに様になり、皆さん満足そうな表情をなさるのが印象的でした。

たまたま図書館に来て、「バッタ」作りに参加していた母親は、「学校で『ふれあいこどもまつり』のポスターは見たが、こんなに面白いのなら、来年は必ず舞台上演も見たい」と言っていました。来年は3月15日(日)ルミエールで開催されます。皆さんも見に来てください。面白くて、楽しいことは請け合います。

(梅沢みどり)

都市農業の保全・
振興には市民団体
の参加も必要

農業・農地保存研究会 活動中間報告

今日まで過去3回、府中に適合した農業・農地保存策を提案する準備として関連情報を習得する作業(勉強)を行いました。

都市に農業・農地を残す国(農水産省、国交省)の動き、即ち、都市のあり方の転換と農業・農地の役割を認識し、国は法規制を改正しようとしています。しかし、農地減少の最大原因である相続税削減は問題含みです。現に都市農業の振興を国も自治体も支援していますが、農地の減少が続いています。

府中では他の近隣自治体と同じく、農地の減少は続いています。耕作放棄地はゼロ、農家の若令化、市民参加型農業の増加、地産地消の増大といった好ましい現象が生じています。

さらに、①東京都の《農業・農地を活かしたまちづくりガイドライン》及び②国交省の《首都圏郊外における今後の都市農業の展開手法》に記載している成功(好評)事例を誌上見学しました。

その中では国立、日野、国分寺、立川、西東京市、練馬区等の事例がありますが、府中市のものでは唯一黒米プロジェクトがありました。隣の芝生は美しく見えるのを、冷静に比較しようと努めました。

都が“東京農業振興プラン”や“農業・農地を活かしたまちづくりガイドライン”を作成し、支援・助成をしていることも知りました。それに呼応するよう、東京都の市部自治体も講師を招いたり、シンポジウムを開いたりして市民(農家だけでなく)の啓蒙を図るべきと思います。

府中の農家・農業団体対象にアンケート調査した結果、今後の農業振興施策で重視してほしいことは以下の通りです。

- ①有機農法の推進 ②空き缶など農地への投棄防止策
- ③府中市の農業PR推進 ④各種補助金の増設 ⑤低農薬対策
- ⑥共同の直売所の設置 ⑦農業経営の指導、相談の充実 ⑧特産化、ブランド化の推進 ⑨後継者の育成
- ⑩農地の緑化など生産緑地の美化の推進 ⑪畝売りの推進
- ⑫定期的な即売会の実施 ⑬学校給食への供給推進
- ⑭直売所の統一 ⑮農業公園の設置

また、府中市農業振興計画(H17.8)施策の体系には次のように記されています。

農業振興の目的

—50年先にも府中に農地・農業を残す—

1. 農地を残す
2. 担い手の確保・育成
3. 魅力ある農業経営の支援
4. 循環型農業の推進

府中農業の将来像

—豊かな市民生活を支える府中農業の実現—

1. 安全で豊かな食生活を支える府中農業
 2. 緑豊かな環境作りを支える府中農業
 3. 安全で快適なまちづくりを支える府中農業
 4. こどもたちの成長を支える府中農業
 5. 心ふれあう地域づくりを支える府中農業
- と詳細に記載されています。

これら、各種の事象・事例を知り、自分なりの地元府中に適合した(農地・農業保存に役立つ)施策・プラン・企画案を提示しあうように合意しました。

今後も研究会を開催しますので、特に農業に関心のある方は、是非ご参加ください。お待ちしております。

(竹田 勇)



「田んぼの学校」の田植えの光景 2013年5月26日撮影

農業振興施策は農業者だけに限定して実施するのではなく、我々市民団体もいれて、相談して欲しいものです。この研究会が発足して、そのことを実感しました。

特に、当団体のように援農ボランティア、レンゲ祭り、田んぼの学校(写真上)、農業用水路の清掃、その他植物・野鳥の調査等を実施している団体が都市農業の保全・振興に関わらないのはおかしいです。

援農ボランティアと収穫祭

2002年(平成14年)から4, 5名のメンバーが押立町の市村良知氏の援農に出かけて、5年後に田村実氏へ、4年前から南町の小林茂氏へと3農園と広がり、ボランティアも延べ23名になり、以下のローテーションで、年間休みなく援農しています。しかも、非市民の会メンバーや農工大学生も加わり、当会の一大事業に成長しました(下記名簿)。

府中市全体で100名余りの援農ボランティアが活躍しているなかで、大きな位置を占めている実感と、責任を感じます。私たちの援農活動が農園主の農作業を助け、農業経営上プラスに働き、農地保全につながる。そう信じて自分たちの活動に誇りさえ持って頑張っています。エコ自慢の種にしています。収穫祭は唯一のイベントで、全員の農園主とボランティアが一堂に会し、バーベキューとお酒を楽しみながら、収穫を祝い、互いの親交を暖め、次年度に向かって頑張ろうという忘年会を兼ねたものです。



妻たけなわの収穫祭 2013年12月1日撮影

今年は3農園主と24名のボランティアが集まりました。一人での農作業はつらいですが、老若男女が一緒に、お喋りをして、農作業するのは、心身ともに健康に役立ちます。参加希望者をお待ちしています。

竹田 勇(援農ボランティア責任者)

農園主	援農日時	メンバー ○印班長 斜体は非市民の会員
市村 良知	第1日曜日 午前中2時間 第3日曜日 〃 第2木曜日 〃 第4水曜日 〃	○渡部 竹田、 <i>深町、牧原</i> ○清水 佐藤秀、 <i>内田、加賀</i> ○竹田 鈴木利、 <i>渡辺紀、佐藤篤</i> ○舘 柿本、 <i>上園、渡部</i>
田村 実	第1日曜日 午前中2時間 第4木曜日 〃	○清水 佐藤秀、 <i>西宮</i> ○竹田 鈴木利、 <i>渡辺紀、八木、佐藤篤</i>
小林 茂	第2、4日曜日 〃 第1、3木曜日 〃	○鈴木利 竹田、 <i>渡辺光、清水真、白神</i> ○竹内 柿本、 <i>羽尻、小西</i>

畑の学校とスイカ祭り

援農ボランティア活動の延長として、自分たちで野菜栽培を体験学習してみようと援農ボランティア仲間が中心になり、“畑の学校”を開設しました(H20.4)。

畑の学校の紹介は、○府中市シニアガイドブック／府中市市民活動支援課発行(H21.3)、○広報ふちゅうの1・2・3



炎天下にはスイカが最高 2013年8月18日撮影

市民／特集NPOボランティア団体(H22.4.21)、○地域も自分も元気になる本／NPO法人府中市市民活動支援センター発行(H25.3.5)、さらに、後援団体(NPO法人府中かんきょう市民の会)の会報で活動報告を行っています。

会則の基本方針①集団農場(共同耕作)、②循環型(環境保全型)農業を目指す、③旬の作物を播種から収穫まで体験学習する、④収穫物はみんなで分けるのもと、楽しいコミュニティガーデンを目指しています。必要な園芸資機材も自分たちで、賄い、各種苦勞もありますが、年間40品目にのぼる野菜を育てています。メンバーは現在23名に増えましたが、その殆どが援農ボランティアを兼ねていて、都立農業高校主催のアグリカレッジ卒業生もいて、農園主に代わり指導してくれます。

会員の親交、農業が好きになってもらうためにイベントを開催しています。イチゴ狩り、スイカ祭りがそれです。特に自分たちが作ったスイカを現地で賞味するのです。このときは暑い夏日を忘れて、自然と頬が緩みます。このスイカ祭りは恒例になっています、私たちの仲間になりませんか。

竹田 勇(畑の学校 校長)

毎月実施して
データを積み重ね

多摩川野鳥観察会

日時 2014年2月2日(日)
9:00~11:30
天候 曇
参加者 22名

天気予報では雨模様でしたが、観察をはじめると薄日もさし暖かさを感じました。

郷土の森博物館前で双眼鏡の使用方を説明し、早速観察開始です。博物館前の植え込みのサザンカの花に蜜を吸いに来るメジロを目の前で観察できました。

郷土の森公園の芝生でツグミ・ハクセキレイなどが見られ、修景池ではマガモ・カルガモ・アイガモ(カルガモとマガモの雑種)が羽を休めていました。今年は冬鳥のツグミの飛来が遅く心配していましたが、ようやく地上に降りる姿が見られました。

多摩川の大丸堰(オマルゼキ)でカワウ・ダイサギなどを全員で見た後(写真上)、上流に向かって移動いたしました。淀みにカイツブリを見てさらに上流に向かい、ニセアカシアの幹をコンコン叩くコゲラを観察、さらに進むとオオバンに出会いました。少し藪の小道を歩き、アオジ、キジバト見た頃から小雨が降り出したので、大丸堰の周辺でカワセミを



探すことにいたしました。戻る途中でジョウビタキ・ホオジロを見た後、カワセミの鳴き声を聞きました。枯れたオオバタクサの天辺に止まっているカワセミを参加者全員で観察できました。

総合体育館の会議室で今日観察できた野鳥の鳥合せをしました(写真下/講師は筆者)。参加者の中に昨年も参加した野鳥に興味を持つ親子連れがいて、野鳥観察会を

続けることの大切さを教わりました。

自然観察は毎月実施してデータを積み重ねることで環境の変化が読み取れます。たくさんの方々の協力により、無事終了したことに感謝いたします。当日観察できた野鳥は以下のとおりです。(大澤邦男)



カイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、トビ、オオバン、キジバト、カワセミ、コゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス
外来種:ドバト、アイガモ
26種+外来種2種

山頂の神社に 立ち退き請求

高尾山の前山 金比羅山に開発の危機

住民が歴史と景観をまもる

「金比羅山の自然と遺跡を守るための要請書(正式名/緑地保全と自然保護の精神に立った公正な判決を求める要請書)」に署名した。そのため、1月23日(木)の午後に現地を見てきた。高尾駅の南口を出て、浅川小学校の少し先にあるクヌギ、コナラなどが生い茂る標高約250mの小高い山である。登山口は複数あるが標高差約70mを登り、おおよそ15分で山頂の金比羅神社についた。署名数は2月10日現在で3090筆とのこと。

金比羅山には戦国時代に北条氏の砦として山がつかわれ、「指揮台石」等の歴史的遺構が残されている。江戸時代には山頂に金比羅神社が設けられ、高尾山に登る前に参拝したことと関東山地の東の突端に位置するため、高尾山の前山(サキヤマ)ともよばれた。

明治になってからは高尾山の滝で修行していた修験者が山頂に社を築き、関東一円から信者が訪れた。戦時には、大本営を移す計画もあり、地下壕が神社の下に多数掘られている。

現在では、地元住民のコミュニティの場として毎月10日には月例祭(ツクナミサイ)も催され、緑あふれる山の景観とともに神社が住民の生活の一部となっている。



山頂の金比羅神社本殿 1月23日撮影

矢野学園の行為

1985年に所有者である矢野学園が金比羅山の山頂を30m削って学校の造成をしようとした。都は条件付きながら許可したが、自然破壊を許さないという住民の運動によって1993年にその計画を断念した。矢野学園が断念した背景には、金比羅神社の敷地利用権があることと住民の反対があったからであろう。

その後、八王子市が同場所を「金比羅斜面緑地保全区域」に指定したことにより、矢野学園は6年間にわたり毎年600万円、計3600万円の補助金(市民の税金)を受け取っ

ている。したがって、住民は所有者が矢野学園であろうと八王子市であろうと現状のままか、自然公園として残っていくだろうと思うのは当然のことである。さらに、市は売却するときは公有地として買い取る計画があるので、事前に通告するように強く要請していた。それが昨年(2023)の2月、大阪の開発業者である三和土木株式会社に突然の売却とははなはだ遺憾な行為である。

「法律は最低限の道徳」であるが、学校法人たるものにはより高い徳性を期待したかった。ちなみに矢野学園は、バレーボールで有名な八王子実践高校を経営している。



住民の悲願である「史跡 自然公園の実現を」の看板が立つ登山口。この緑あふれる樹林帯を15分ほど登ると山頂 2月17日撮影

大阪の開発業者、三和土木株式会社とは？

三和土木株式会社は、大阪市中央区のマンションの1室にあるだけの店舗を構えた建設会社ではないようだ。その三和土木は、①神社の撤去と土地の明け渡し②土地を明け渡すまでの期間、土地の使用料として1か月20万円を支払えと金比羅神社の代表と神主を東京地方裁判所立川支部に訴えてきた。

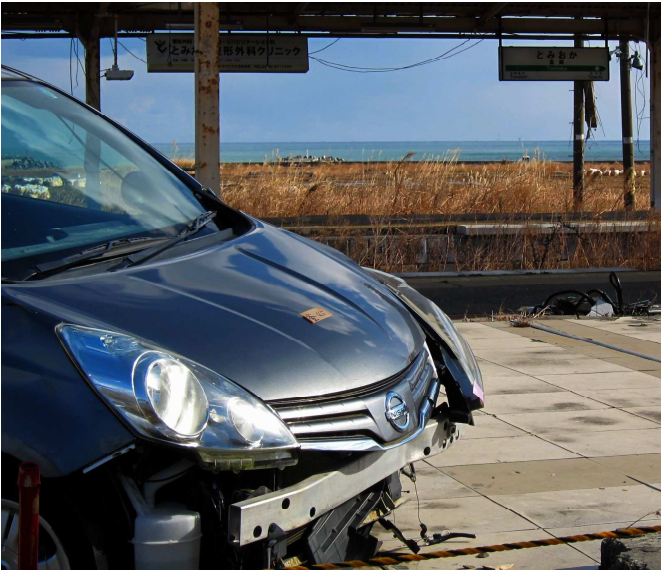
同時に、1億1千万円で購入した土地を八王子市に20億で買い取るようにも交渉している。過去3回の弁論準備では原告側代理人が弁論準備室にはいらず、テーブルの真ん中に置かれた通話機でやりとりするという異様な光景だ。

開発して100戸の住宅をつくるというが、取付け道路がなく地下壕の問題もあり、採算の取れる事業とは思えない。地下壕は残土で埋めてしまえばよいと言っている。初めから公有地として高く買い取らせようとする意図だろう。

この経緯をみると、利権がらみの土地ころがしの可能性大である。かけがえのない歴史的遺産と地域の絆でもある金比羅神社を開発から守らなければならない。(葛西利武)

本稿を脱稿後、朝日新聞(2/26)によると八王子市が5億円で購入の方向のようだ。

原発被災地に行く



原発事故前は特急も止まった富岡駅。津波で壊されたクルマもホームに乗り上げたまま。線路は草茫茫々。むなしく下がる駅名板の背後に海が広がる。1月13日撮影

過酷な原発事故で故郷を失った人々、この現場を見て、同じ思いを共有しなければ…。訪れてみたいと願っていたが、チャンスがやってきた。

過酷事故を引き起こしながら、不可抗力だと開き直る東電に謝罪を求め、賠償させるためにがんばっている福島の人達が、現場を体験すると、案内してくれた。

2014年、正月明け早々に、上野駅から特急「スーパーひたち」で、いわき駅に降り立つ。常磐線はそこから23キロ先、5つ目の広野駅で折返し運転をしているが、首都圏からはいわき駅が事実上の終着駅となって間もなく3年を迎えようとしている。

いわき市は、北端の久ノ浜地区が第一原発から30キロ圏にかかり、一時は18万人あまりが避難を余儀なくされ、街はパニックとなった。海岸部の一部は津波で流され、住宅の基礎部分が残されたまま。流失した商店が共同でプレハブの「浜風商店街」を開いていた。



帰還見込みが立たないのに、除染物仮置き場を提供した写真を示して語る住職の早川さん。(寶鏡寺の本堂で) 1月13日撮影

北に進むと、全町民5200人が避難した広野町だ。原発事故の6カ月後に、「避難準備区域」が解消され、役場も戻ってきたが、住民は今も2割ほどが戻っただけ。再開された小学校と中学校には、いわき市内の仮設住宅からバスで通学することも達もいて、母親達を心配させている。

第一原発から20キロ圏に位置する北隣の檜葉町との境目には、Jビレッジがある。東洋一と銘打って、サッカー練習場を作った東電の地元対策だ。ここは事故後から1年半にわたり封鎖線が敷かれていたが、現在は原発事故収束のために働く労働者の生活拠点だ。原発労働者は、ここで防護服に身をかため、バスで第一原発に向い、仕事のあとは放射線量の検査や除染を受ける。

事故前の美しい山里はよみがえらない

檜葉町は事故から1年半後に「避難指示解除準備区域」となり、泊まれないものの昼間の活動は自由にできるようになった。目につくのは除染作業で出た大量の低レベル核廃棄物だ。町内には、黒いビニール袋を満載したトラックが走り、仮置き場では忙しくクレーンが黒い袋をつり上げている。

檜葉町役場から2キロ西に暮らしていた寶鏡寺の住職の早川さん(75)は、本尊などを盗難から守るため、仏像3体とともに、いわき市内の6帖2間のアパートに身を寄せている。仏像はケースに入れて押し入れの中だ。

早川さんは帰還準備のために、所有する田んぼを除染物の仮置き場として提供したことについて、「貸しなくなかったが、誰も貸さないからやむを得ない」という。しかし、帰還できたとしても事故前の美しい山里がよみがえることは絶対になんていい、事故収束に向けて東電が真面目に取り組んでいるかは疑問で、「私も戻れないし、戻るとは云えない。例えば百歳まで生きられたとしても、廃炉はまだ終わらないだろう…」と苦渋の言葉を呑み込む。

第二原発前を通過して、第一原発10キロ圏に入る。このエリアで約1万6000人の人口を抱えていた富岡町。事故前は仙台行きの特急も止まった富岡駅だが、津波で完全に破壊され、壊れたホームや改札口の無惨な姿を太平洋に向かってさらし続けている。駅前ホテルや飲食店も破壊された状態のまま時間が止まっている。高レベルの放射能汚染のため、被災建物の取り壊しはおろか、避難命令のため住民が避難したまま、3年近く放置されているのだ。居住制限地区のために夜間は文字通りゴースタウンと化する。

同じ町内には駅から4キロ先の夜の森地区から帰還困難地区が始まり、隣の大熊町、そして双葉町へと続き、一般人は立ち入ることもできない。無人の荒れ果てた町には飼育されていた豚と猪が交雑したイノブタが徘徊し、原発事故で荒廃した町を象徴する存在ともなっている。昼間、見かけるのは警察車両、行政のパトロールのみだ。

日本の歴史上、最悪で最大の公害とも云える、目に見えない放射能とたたかう原発被災地域の人々、避難を続けざるを得ない人達の気持ちを、少しは理解できたように思う。

(館 浩道)